内村鑑三
『デンマルク国の話』における信仰・農業・愛国主義

田　中　琢　三*

はじめに

本稿では、内村鑑三（1861-1930）の『デンマルク国の話』（1913）を取り上げて、内村における愛国主義とキリスト教信仰の関係性を、このテキストで顕著にみられる農本主義の思想を手がかりにして再検討してみたい。比較の対象として『デンマルク国の話』と同様に植樹をテーマにしたフランスの作家ジャン・ジオノ（Jean Giono, 1895-1970）の小説『木を植えた男』（*L'Homme qui plantait des arbres*, 1953）や、内村と同時代の近代フランスのナショナリズム、特にモーリス・バレス（Maurice Barrès, 1862-1923）の国家主義的なイデオロギーを取り上げる。なお、内村の愛国思想は広い意味で「ナショナリズム」と言い表すことができるが、フランス革命を起源とする西洋の「ナショナリズム」とは一線を画すものであるので、本稿においては「愛国主義」という表現を使用する。また、「農本主義」とは農業を立国の基本にすえる思想のことであるが、本稿では「農業」という言葉を林業も含んだ広義の意味において用いることにしたい[1]。

1.『デンマルク国の話』について

『デンマルク国の話』は1911年10月22日に行われた講話を文章化したものであり、1913年2月21日に『デンマルク国の話　信仰と樹木とをもって国を救いし話』というタイトルのもと聖書研究社から小冊子として刊行された（初出は『聖書之研究』136号、1911年11月10日）。講話の概略は以下の通りである。

デンマークは、1864年にプロイセン・オーストリア連合軍との戦争に敗れた結果、ユトランド半島南部の肥沃なシュレースヴィヒとホルシュタインの二州を割譲し、窮状に陥る。その時、デンマークの工兵士官エンリコ・ダルガスが「外に失いしところのものを内において取り返す」と宣言して、ユトランド半島のヒースの荒地を開墾して植林し、新たな農地を生みだした。さらにエンリコの長男フレデリック・ダルガスが、建築用木材となる大樅を成長させる方法を発見する。このようにダルガス父子は敗戦後のデンマークを、戦争や侵略ではなく、平和的な手段で復興させることに成功する。

鈴木（2012）や村井（2014）によると、内村が情報源にしたと思われるのは、講演と同年の1911年の7月に刊行されたアメリカの雑誌『マクルーアーズ・マガジン』（*Maclure's Magazine*）の37巻3号に掲載されたヘンリー・ゴダード・リーチ（Henry Goddard Leach, 1880-1970）の記事「荒地の再生。デンマークはいかに荒野を農業国に変えたか？」（Reclaiming the Heath. How Denmark Converted a Desert into a Farming Country）である。指摘すべきは、内村の『デンマルク国の話』は、リーチの記事に書かれたエピソードをもとにしているが、記事の内容をそのまま伝えるものではなく、脚色が施されていることである。

＊お茶の水女子大学・准教授

リーチの記事によると、エンリコ・ダルガス（Enrico Dalgas, 1828-1894）の長男はフレデリック・ダグラスではなくクレスチアン・ダグラス（Christian Dalgas, 1862-1939）であり、大樅を成長させる方法を発見したのもクレスチアンである。また、実際に植樹を推進した団体で、エンリコ・ダルガスがその初代会長であった「デンマーク・ヒース協会」（Det danske hedeselskab）について内村は何も語っていないことも注目すべきであろう。内村がこの団体に全く言及していないのは『デンマルク国の話』をわかりやすい偉人伝にするためだと思われる。

さらに『デンマルク国の話』において重要なフレーズである「外に失いしところのものを内において取り返す」というエンリコ・ダルガスの言葉は、実際はデンマークの詩人ハンス・ペーター・ホルスト（Hans Peter Holst, 1811-1893）の言葉であり、1872年の北欧産業芸術博覧会の記念メダルに刻印されたものである。ただしリーチの記事でもエンリコの言葉として紹介されており、これは内村が脚色したエピソードではない。

いずれにせよ、『デンマルク国の話』が現実の社会に与えた影響は大きく、刊行から2年後には東北地方の山林所有者が数百万本の植樹を行うなど、この作品が契機となって実際に日本や朝鮮半島において植樹が推進された（鈴木, 2012, p. 178）。また、1934年に岩波書店編集の中学校国語漢文科用教科書『國語』巻3に「興國の樅」として紹介され、戦後の1947年には、文部省編纂の『国語』第六学年上に「みどりの野」の題で収められた。そして、1950年代から60年代にかけて『デンマルク国の話』の抄録やドイツ文学者の高橋健二による翻案「緑のデンマーク」を収めた小中学校の教科書が10種類以上刊行されている（久保田・木村, 2014）。これは戦後の学校教育に、敗戦からの復興と平和主義をテーマにしたこのテキストが最適であったからであろう。また、1946年には岩波文庫の『後世への最大遺物・デンマルク国の話』が刊行されており、このことで広く一般の読者に読まれることになったと思われる。

2.『木を植えた男』について

以下では『デンマルク国の話』と同じく植樹による自然の再生の物語であるジャン・ジオノの『木を植えた男』を取り上げて、この短編小説と内村の講話を比較してみたい[2]。

『木を植えた男』は南仏のプロヴァンス地方を舞台に、妻子を亡くしたエルゼアール・ブフィエが、たった一人で荒れ果てた高原に木を植え続け、ついには広大な森林を生み出すという物語である。語り手の「私」がブフィエと初めて出会った1913年から1945年に最後にブフィエに会うまでの約30年間の森の再生のプロセスを、1953年時点の「私」が回想するという形式の小説である。この作品はジオノがアメリカの雑誌から「私がこれまで出会ったなかで最も忘れがたい人物」というテーマで依頼を受けて書いたものであるが、実際は全くのフィクションである。後にカナダのアニメーション作家フレデリック・バック（Frédéric Back, 1924-2013）がこの小説をアニメ化しているが、1987年に公開されたこの映画は大きな反響を呼び、カナダでは実際に植樹運動が起こって、公開の年には2億5000万本（それまでは年間約3000万本）の植樹が行われたという（高畑, 1990, p. 83-93）。

指摘すべきは『木を植えた男』では、植樹による再生のアンチテーゼとして二つの世界大戦が語られていることである。「私」がブフィエと初めて会った翌年の1914年に第一次世界大戦が勃発し、「私」は5年間従軍するが、主人公のブフィエのほうは二つの大戦とは無縁であることが以下のように強調されている。「彼は30キロ離れたところにいて、平和に仕事をつづけながら、第一次世界大戦を知らなかったうえに、第二次世界大戦も知らなかったのである」（p. 77-78）。

『木を植えた男』と『デンマルク国の話』の共

通点として、両作品とも現実の世界に大きな影響を与え、大規模な植樹運動を促す原動力になったことが挙げられる。さらに、内村もジオノも平和主義者であり、それが作品に反映されていることも類似する側面として指摘できるだろう。内村は周知のように1904年の日露戦争を機に非戦論者になり、他方でジオノは、『木を植えた男』の語り手の「私」と同じように、第一次世界大戦に従軍してヴェルダンで戦い、この戦争のトラウマから平和主義者になっている（山本, 2014, p. 183）。

そして、『デンマルク国の話』と『木を植えた男』の最大の共通点は、どちらもエコロジーの思想を具現化した再生の物語であることである。また両作品とも、もともと荒地だった土地ではなく、かつては豊饒であったが荒野になりはてた土地を植樹によって甦らせていることも指摘しておきたい。他方で、『デンマルク国の話』と『木を植えた男』の最も大きな違いは、国家という観点、あるいは愛国心の有無である。『デンマルク国の話』における植樹は、敗戦国を復興させることが第一の目的であり、自然の再生はその結果である。それに対して『木を植えた男』の主人公は、ナショナルな問題とは全く関係がなく、自然の再生そのものを目的として行動しているのである。

3.『デンマルク国の話』におけるキリスト教

「信仰と樹木とをもって国を救いし話」という副題が表しているように、『デンマルク国の話』では、国力の源としてのキリスト教信仰の重要性が強調されている。また「キルケゴールを出して無教会主義のキリスト教を世界に唱えしめしデンマーク」（p. 81）という表現があるように、内村はデンマークのキリスト教に共感を抱いていた。そして、以下の引用が示すように、ダルガスの事業の成功は何よりも信仰の力によるものだとされる。「世に勝つの力、地を征服するの力は信仰であります。ユグノー党の信仰はかれらのなかの一人をもって鋤と樅樹とをもってデンマーク国を救いました。ダルガス一人に信仰がありましてもデンマーク人全体に信仰がありませんでしたならば、彼の事業も無効に終わったのであります。この人あり、この民あり、フランスより輸入されたる自由信仰あり、デンマーク自生の自由信仰ありて、この偉業が成ったのであります」（p. 94）。

『デンマルク国の話』には聖書からの直接的な引用が4箇所ある[3]。エピグラフの「曠野と湿潤なき地とは楽しみ、沙漠は歓びて番紅のごとくに咲かん、盛に咲きて歓ばん、喜びかつ歌わん、レバノンの栄えはこれに与えられん、カルメルとシャロンの美しきとはこれに授けられん、彼らはエホバの栄を見ん、我らの神の美わしきを視ん」（p. 78）は、『旧約聖書』「イザヤ書」35章1-2節からの引用である。また、ダルガスが植樹した樅が海岸から吹く砂塵を食い止めるエピソード（p. 90）において、『旧約聖書』「ヨブ記」38章11節「ここまでは来るを得べし。しかしここを越ゆべからず」を、信仰の偉大な力について語っている箇所（p. 94）では、『新約聖書』「マタイによる福音書」17章20節の「もし芥種のごとき信仰あらば、この山に移りてここよりかしこに移れと命うとも、かならず移らん、また汝らに能わざることなかるべし」と『新約聖書』「ヨハネの手紙二」5章4節の「おおよそ神によりて生まるる者は世に勝つ、われらをして世に勝たしむるものはわれらの信なり」をそれぞれ引用している。

ほかにも聖書を出典とする次のようなパッセージがある。「『今やデンマークにとり悪しき日なり』と彼の同僚はいいました。『まことにしかり』とダルガスは答えました。『しかしながらわれらは外に失いしところのものを内において取り返すことができる、君らと余との生存中にわれらはユトランドの広野を化して薔薇の花咲くところとなすことができる』と彼は続いて答えました。この工兵士官に預言者イザヤの精神がありました」（p. 84）。ここで言及されている「預言者イザヤ

の精神」とは、『旧約聖書』「イザヤ書」2章4節の「彼らは剣を打ち直して鋤とし　槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことは学ばない」を典拠としている。指摘すべきは、「君らと余との生存中にわれらはユトランドの広野を化して薔薇の花咲くところとなすことができる」というパッセージは内村が参照したリーチの記事には存在しないことである（村井, 2014, p. 394）。この文章は、エピグラフに掲げた「イザヤ書」のイメージを想起させ、ダルガスの行動がキリスト教精神に基づくものであることを強調するための、内村の創作だと考えられる。

また『デンマーク国の話』には、『旧約聖書』「出エジプト記」6章1―3節の「荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた」を典拠とする以下のような箇所もある。「『ダルガスよ、汝の預言せし材木を与えよ』といいてデンマークの農夫らは彼に迫りました。あたかもエジプトより遁れ出でしイスラエルの民が一部の失敗のゆえをもってモーセを責めたと同然でありました」（p. 88）。

他方で、『木を植えた男』にもキリスト教に由来する表現や聖書的なイメージが随所に見られる。例えば、主人公のブフィエが「神」（Dieu）のような人物であることが繰り返し語られる（p. 74, p. 77, p. 80）。このフランス語のDieuは、おもにユダヤ教やキリスト教の神を意味する語である。また、『新約聖書』「ヨハネによる福音書」11章に登場するラザロへの言及（p. 79）がみられたり、植樹によって再生した土地について、『旧約聖書』で「乳と蜜の流れる土地」（「申命記」26章15節）と称される「カナンの地」に例えた箇所もある（p. 80）。

指摘すべきは、『木を植えた男』の結末部で荒れ地が森となってよみがえった土地の描写が、『デンマルク国の話』のエピグラフが喚起する理想郷のイメージと重なっていることである。「泉水がつくられ、水が豊かにあふれていた。最も心をうたれたのは、泉水のかたわらにボダイジュが植えられていたことだった」［...］新しい家々は壁も塗りたてで、菜園にかこまれ、野菜と花が、キャベツとバラが、ネギとキンギョソウが、まじりあい、しかもきちんとならんで育っていた。ここはいまや、人々が住みたいとねがう場所だった」（p. 79）。

だだし、ジオノは内村と違ってキリスト教の信者ではなく、むしろ反カトリック的であり、汎神論的な世界観を持つ作家であった。聖書に関してジオノは以下のように語っている。「聖書はこれまでずっと文学の本、歴史の本、詩あるいは年代記などの本として読んできました。宗教の本として読んだことは一度もありません。［...］聖書は芸術作品、つまり何かをもとにして作り出された作品だとみなしていたわけです。そういうものとして接する限り、聖書は私にはとても興味深い作品だったのです」（山本, 2014, p. 29）。

いずれにせよ『デンマルク国の話』と『木を植えた男』に類似したキリスト教的なイメージが見いだせるのは、内村とジオノの両者が聖書に親しんでいたからにほかならない。『木を植えた男』に限らずフランス文学の作品には聖書的な表現やイメージが頻出するが、聖書からの引用をちりばめた『デンマルク国の話』はこの意味においてフランス文学と親近性が感じられる。他方で、『木を植えた男』において、キリスト教の信仰を持たないジオノが、神ではなく、神のような力を発揮する人間の偉大さを称えているのに対して、内村は人間の偉大さは信仰の力に由来するものであることを強調するという相違があることも指摘しておきたい。

以上のように、『デンマルク国の話』において、内村は情報源としたリーチの記事をある種の教訓話に脚色し、聖書の文学的で詩的なイメージをちりばめながら、農業国で信仰に篤い平和主義国というデンマークの理想化されたイメージを日本に伝えようとした。したがって、『デンマルク国の話』は、現実のデンマークを伝えるための客観的

な報告ではなく、『木を植える男』がそうであるように、思想的・宗教的なメッセージを伝えるための創作された物語として読むことが可能である。そのような文学的な性格を帯びたテキストであるからこそ、多くの読者を獲得し、現実社会に影響を与えることができたのであろう。

4. 内村における農本主義と愛国主義

以下では、この内村のメッセージの核となっている農本主義について検討してみたい[4]。札幌農学校を主席で卒業し、北海道開拓使、農商務省農務局水産課に役人として勤めた内村は、農業や水産業に造詣が深かった。愛国者として彼は以下のように植樹の重要性を訴えている。「国を興さんと欲せば樹を植えよ。植林これ建国である。山林は木材を供し、気候を緩和し、洪水を防止し、田野を肥やし、百利ありて一害なし。[...] われらは日本全国を緑したたる楽園（パラダイス）に化して、全世界の排斥に応ずることができる。製造、商業、励むべしといえども、忘るべからざるは、農の国本たることである、そして農の本元は森林である。樹に木が茂りて、国は栄ゆるのである」（「樹を植えよ」、『全集』28巻、p. 316：初出『国民新聞』、1924日7月17日）。また、内村の主著『代表的日本人』でも、上杉鷹山（1751-1822）と二宮尊徳（1787-1856）に関する章で、荒地の開墾や植樹による土地の再生が語られている。

重要なことは、以下の引用が示すように、内村においては、農本主義が平和主義と結びついていることである。「日本人が好戦の民にあらずして平和を愛する民であることは、彼らの大多数が農民であることによってわかる。[...] 今も昔も異なることなく農は日本国の基である。かかる国が剣をもって世界を征服する国でありようはずはない」（「日本の天職」、『全集』28巻、p. 401-402：初出『聖書之研究』292号、1924年11月10日）。

また、土地の開拓に関して、内村は「横なる拡張」と「縦なる拡張」という対照的な概念を提起している。「横なる拡張」とは領土を広げていくことであり、土地は有限であるので必ず国家間の争いが起きる。それに対して「縦なる拡張」とは無限の富を有する山や海を開拓することである。「縦なる拡張」は「他国と少しも競争することなく、優に自由に拡張することができる」（「拡張の横縦」、『全集』28巻、p. 334：初出『聖書之研究』289号、1924年8月10日）。そして内村によると、キリスト教の信仰を深めることも精神的な側面での「縦なる拡張」なのである。

内村においては、農本主義と平和主義はキリスト教信仰と不可分の関係にある。内村は「創世記」1章28節の「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」を以下のように解釈する。「他人の国を奪えとの意にあらず。服従はこの場合において開拓の意なり。荒野を変じて田園となせよ。地の与えうるすべての産物を得よ」（「創世記第一章」、『全集』8巻、p. 352：初出『聖書之研究』5号、1901年1月22日）。

また、『新約聖書』が予言するキリストの再臨と農業の関係を以下のように述べている。「キリストが再び現われ給うて選民をもって世を治め給う時に、人はその剣を打ちかえて鋤となし、その槍を打ちかえて鎌となすという。[...] すなわち軍国主義を捨て農本主義をとるというのである、キリスト再現の結果として国は国にむかいて剣をあげず戦闘の事を再び学ばざるに至って地は一大農園と化して元始の平安に還るというのである。国の利益は全くこれなり」（「再臨と豊稔」『全集』24巻、p. 337：初出『聖書之研究』219号、1918年10月10日）。

内村によると農業は平和をもたらし、農業を捨てると戦争が起きるが、それは神意に背くからにほかならない。「神は地を園として、人を耕者（農夫）として造りたもうた。そうして人が神を離れざる間は、地はすべて必需物を豊かに供して、神は不足を感ずることはなかった。しかるに人、神

にそむいてより、相互の敵となり、ここに戦争始まりて、人は地を耕すことを怠りて相互を殺すことを勤むるに至った」（同書、p. 338）。さらに内村は「第一にキリストの福音を伝えよ、第二に樹木を植えよ。［...］人のすべての善き事はキリストより来り、国のすべての善き事は樹木より来る、人の心にキリストが宿り給い、国の表面に樹木が茂りて天国は地上に臨むのである」（「植樹の福音」、『全集』21巻、p. 221-222：初出『聖書之研究』175号、1915年2月10日）と主張し、国にとっては、植樹が布教と同等の重要性があることを強調しているのである。

周知のように、内村においては愛国思想とキリスト教信仰は分かちがたく結びついている。そのことは「私に愛する二個のJ. ジエーがある、其一はイエス（Jesus）であって、其他の者は日本（Japan）である」（「私の愛国心について」、『全集』29巻、p. 351：初出『聖書之研究』305号、1926年1月10日）という有名な文章によく表れているが、指摘すべきは、彼の愛国主義が軍国主義と結びついたものではないことである。そのことは内村自身によって以下のように強調されている。「私の愛国心は軍国主義をもって現われない。［...］武力をもって世界を統御し金力をもってこれを支配せんと欲するがごとき祈願は、私の心に起こらない。私は日本を正義において世界第一の国と成さんと欲する」（「私の愛国心について」、『全集』29巻、p. 351-352：初出『聖書之研究』305号、1926年1月10日）。

そして、こうした内村の愛国主義のあり方はイエスを模範とするものである。彼によるとイエスは「政治的にまたは軍事的に彼の国に尽くさなかった。［...］われらもまたわれらの国を愛さなければならない。しかもイエスのごとくにこれを愛さなくてはならない。［...］すなわち剣をもってせずして義をもってして国を救うの行為に出でなければならない」（「イエスの愛国心」、『全集』17巻、p. 307：初出『聖書之研究』122号、1910年8月10日）。また、内村の愛国心は自国中心主義ではなく、利他的であり全世界の発展を願うものであった。「全世界はわが国のために存在するもの、わが国こそ世界に覇たるの運命を有すと思いて行動するは、誤りたる愛国心である。［...］われはわが国のために尽くして、世界全人類のために尽くすのである［...］真の愛国者は他国の権利を重んじ、その発達を希望する」（「キリスト教と愛国心」、『全集』28巻、p. 303：初出『聖書之研究』288号、1924年7月10日）。そして、内村の墓碑に刻まれた彼自身の言葉 « I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God. » においても、世界のために日本があることが示されているが、それは信仰を前提としたものであり、キリスト教者の内村にとってはすべてが神のために存在するとされるのである。

5. バレスのナショナリズムとの比較

以下では『デンマルク国の話』と同時代である第一次世界大戦前のフランスのナショナリズムを取り上げて、内村の愛国主義との比較を行ってみたい。デンマークが1864年にプロイセン・オーストリアとの戦争に敗北し、シュレースヴィヒとホルシュタインの両公国をドイツに割譲したのと同様に、フランスは1870年の普仏戦争においてプロイセンに敗北し、その結果、アルザス地方の大部分とロレーヌ地方の一部をドイツに割譲することになった。普仏戦争の敗北後のフランスでは、ドイツに対する復讐や反ユダヤ主義を主張する排外主義的なナショナリズムが高揚する。この近代フランスのナショナリズムを最も典型的に体現する人物がモーリス・バレスである。

1862年生まれのバレスは、1861年生まれの内村鑑三とまさに同時代に生きたフランスの小説家・政治家である。ドイツとの国境に近いロレーヌ地方に生まれ、少年時代に体験した普仏戦争の敗北とアルザス・ロレーヌ地方のドイツへの割譲

が、のちにバレスをナショナリズムに導く一因となる。19世紀末のドレフュス事件をめぐる論争において、バレスは軍部や伝統的価値を擁護し、過激な反ユダヤ主義を唱え、近代フランスを代表する右翼のナショナリストとなる。また、バレスは20代の頃から政治家としても活動しており、1889年から1893年まで、さらに1906年から死去する1923年まで国会の下院議員を務めた。

バレスのナショナリズムは「大地と死者」（la terre et les morts）という表現で定式化される。「大地」は生まれ育った土地、「死者」は祖先を意味するが、バレスによると、人間は「大地と死者」によって決定されているものであり、「大地と死者」は国家の基盤となる。このようなバレスの思想は、国を歴史や文化を共有する民族の共同体とみなすドイツ型のナショナリズムに近く、実際、ナチス・ドイツの「血と土」（Blut und Boden）のイデオロギーと類似する点がみられる[5]。また、バレスは信仰を持つことはなく、キリスト教の教義にも特に関心をよせることはなかったが、伝統主義者としてカトリシズムを擁護した。バレスによると、カトリックは先祖代々受け継がれたフランスの精神そのものであり、国家の伝統を体現するものなのである[6]。

このようなバレスのナショナリズムと内村の愛国主義には顕著な相違がある。まず、バレスは失った国土を取り戻すためにドイツに復讐することを訴えたが、『デンマルク国の話』におけるダルガスは、戦勝国に対する報復感情はなく、奪われた領土に対する執着もみられないのであり、内村はそのような態度を高く評価している。また、フランスも農業国であるがバレスには内村のような農本主義の思想はみられない。そして、国会議員でもあったバレスは、キリスト教を伝統主義的な政治的イデオロギーに結びつけたが、内村の愛国主義にはそのような政治思想との直接的な関連性は見受けられない。また、バレスのナショナリズムは帝国主義の時代に対応して生まれた排外主義的なイデオロギーであり、反ユダヤ主義に代表される当時のレイシズムの影響を色濃く受けたものである。内村の愛国主義にも外国の侵略に対する危機感が背景として存在するものの、基本的には信仰と結びついた平和主義を基調とする宗教思想であり、自国の利益だけではなく他国の利益、全人類の発展を願う思想である。

このように内村とバレスの思想は極めて対照的であり、それは信仰の有無によるところが大きいが、他方では共通する面も見られる。ひとつは自国の伝統に対する深い愛着である。内村は日本の伝統文化、特に武士道のモラルを尊重し、バレスは「大地と死者」の思想に基づいて、先祖代々の宗教であるカトリシズムの社会的・文化的な伝統を守ろうとした。もうひとつの共通点は「アウトサイダー」としての強い愛国心である。河上徹太郎が近代日本の「アウトサイダー」を論じる際に、内村をその典型とみなしているように（河上，1961）、内村は当時はまさに辺境の地であった北海道でキリスト教に入信し、宗教的には教会組織に属さない異端の無教会主義を唱え、政治的にも「富国強兵」路線に与しないという明治・大正期の「アウトサイダー」であった。他方でバレスも、フランスの辺境ロレーヌ地方の出身であり、正統であるカトリックの信者になることはなく、政治的にも基本的には反体制の右翼ナショナリストとして活動していた。また、思想的も反近代的であり主流派に属さないバレスは、政治家としても文学者としても「アウトサイダー」的なポジションに位置していた。この観点から興味深いのは、俗世間との交渉を絶って山中で木を植え続ける『木を植える男』の主人公ブフィエも、社会の周辺で活動するまさに「アウトサイダー」であることである。この点において、内村、ブフィエ、バレスは重なりあう存在であり、正統の権威や既存の枠組みにとらわれない「アウトサイダー」であることが、彼らの思想や行動の源になっているともいえるだろう。

おわりに

『デンマルク国の話』の発表当時、欧米諸国の視点から見ると、日露戦争に勝利して軍事力は示しながらも、地理的、領土的には辺境の小国であった日本は、西洋中心の世界においてはまさに「アウトサイダー」的存在であった。自らも「アウトサイダー」であった内村は、自分と日本の置かれた立場を重ね合わせ、そのことが彼の愛国心をさらに強くしたのではないかと考えられる。注目すべきは、内村が日本は小国であるからこそ人類に貢献しうる優れた特権的な国であると主張していることである。彼によると「世界人類に最高文明を共せし国はいずれも小国であった。預言者を出して人類の到達すべき終極の目的を示せしユダヤは、バビロンとエジプトの間にはさまる小国であった。[...] 人類の今日あるは、小国、すなわち歴史家のいわゆるBorderland境界国のたまものである」(「倣うべき国」、『全集』28巻、p. 349：初出『国民新聞』、1924年8月20日）という。

そして、デンマークもヨーロッパの辺境に位置する北欧の小国であり、内村にとっては日本と同様に人類に貢献しうる特別な国であった。彼によると日本やデンマークのような小国が行うべきことは、周辺国に侵略して領土を広げる「横なる拡張」ではない。日韓併合の翌年に行われた『デンマルク国の話』の講演にも、やはり領土拡張政策に対する批判が込められている。日露戦争以後に非戦論を唱えた内村にとって、日本が進むべき方向は、戦争という手段をともなわない「縦なる拡張」、つまり限られた国土で農地を開拓し、その地でキリスト教信仰を深化させることであった。そして、それは帝国主義に対するアンチテーゼであるとともに、内村の平和主義的な農本主義が必然的に到達した帰結なのである。

注

1.『デンマルク国の話』からの引用は『後世への最大遺物・デンマルク国の話』（岩波文庫、2011年）を使用し、頁数のみを記す。それ以外の内村の文章の引用は『内村鑑三全集』（全40巻）(岩波書店、1980-1984年）を使用し、『全集』と記す。これらの引用は現代表記に改めた。
2.『木を植えた男』からの引用は、高畑勲『木を植えた男を読む』（徳間書店、1990年）に収録された高畑による翻訳を使用し、頁数のみを記す。ただし筆者が適宜改訳を施した。
3. 聖書からの引用は『聖書　新共同訳』（日本聖書協会、2011年）による。
4. 内村の農本主義については三浦（2017）をおもに参照した。
5. バレスの「大地と死者」とナチスの「血と土」は、遺伝（「死者」「血」）や環境（「大地」「土」）を重視した生物学的な決定論を土台としている点が共通している、そして、両者とも、決定論的な法則に従属する存在としての人間、そして全体のために奉仕する個人という全体主義的な思想と結びついている。しかし、「血と土」の「土」が一義的には農地を意味し、ナチスの農本主義的な側面が示されているのに対して、「大地と死者」の「大地」は先祖代々の土地、つまり郷土や祖国という意味合いが強く、バレスの伝統主義的な思想が反映されたものである。
6. バレスについてはChiron (2000) をおもに参照した。

主要参考文献

＜内村鑑三の著作＞
内村鑑三『後世への最大遺物・デンマルク国の話』(改版)、岩波文庫、2011年。
内村鑑三『内村鑑三全集』（全40巻）、岩波書店、1980-1984年。
内村鑑三『＜内村鑑三小選集＞愛国心をめぐって：普遍の愛と個別の愛』、書肆心水、2006年。
＜内村鑑三に関する研究＞
河上徹太郎『日本のアウトサイダー』、中央公論社、1961年。
鈴木範久『内村鑑三の人と思想』、岩波書店、2012年。
菊川美代子「内村鑑三の愛国心」、『アジア・キリスト教、多元性』、現代キリスト教思想研究会、第6号、2008年3月、p. 73-86。
三浦永光『改訂版　現代に生きる内村鑑三：人間と自然の適正な関係を求めて』、御茶の水書房、2017年。
＜その他＞
久保田治助・木村陽子「戦後始発期の国定教科書にみる学校教育像：国語教科書におけるデンマークに着目して」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀

要』、鹿児島大学教育学部、第23巻、2014年、p. 251-256。
カール・スコウゴー＝ピーターセン『デンマーク人牧師が見た日本：明治の宗教指導者たち』、長島要一訳・編注、思文閣出版、2016年。
高畑勲『木を植えた男を読む』、徳間書店、1990年。
田中琢三「高畑勲とフランス文学：『ことばたち』と『木を植えた男を読む』をめぐって」、中丸禎子・加藤敦子・田中琢三・兼岡理恵編著『高畑勲をよむ：文学とアニメーションの過去・現在・未来』、三弥井書店、2020年、p. 328-343。
村井誠人「『デンマルク国の話』と我が国のデンマーク像の変遷」、『歴史と地理』、第339号、1983年、p. 1-15.
村井誠人「彼我を視野に据えての「ダルガス神話」成立の再考」、『IDUN：journal of Nordic Studies：北欧研究 』、大阪外国語大学外国語学部、14号、2014年、p. 387-410。
百瀬宏・村井誠人監修『北欧』（読んで旅する世界の歴史と文化）、新潮社、1996年。
山本省『天性の小説家　ジャン・ジオノ：「木を植えた男」を書いた男』、彩流社、2014年。
吉武信武『日本人はデンマークから何を学んだか：日本―北欧政治関係史』、新評論、2003年。
Yves Chiron, *La Vie de Barrès*, Godefroy de Bouillon, 2000.
Jean Giono, *L'homme qui plantait des arbres*, Gallimard, 1983.

※本研究は、JSPS科研費JP19K00532の助成を受けたものである。